共通協議主題（概要）

共通協議主題 「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について	（協議の視点②） 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）や参考資料（初版）等を踏まえ、子供の発達や学びの連続性を確保するため、各園や学校としてこれから何に取り組んでいく必要があるのか。

１　実践報告の概要

（１）【三次市立神杉小学校】

①　研究主題

乳幼児期に育まれた資質、能力を児童期の学びにつなげる接続の在り方

～安心して主体的に自己を発揮するための工夫～

②　実践報告の概要

幼児教育長期派遣研修では、「乳幼児期に育まれた資質・能力を児童期の学びにつなげる接続の在り方」と研修題目を設定し、研修を行った。乳幼児期には保育者が受容的、共感的に関わることで人間関係や言葉の基礎である心情面が育まれることが分かった。また、幼児期には、それに加え保育者を中心とした関わりから友だちとの関わりへと広がり、やりとりを楽しむ中で言葉や文字に関する感覚も豊かになり、乳幼児期の遊び、生活、環境を通して学んだことが児童期の学びにつながっていることを実感した。

研修を通しての学びや気付きを生かし、「安心」「学びのつながり」をベースにスタートカリキュラムの見直しを行った。工夫例としては、担任として１年生の子供たちの不安、期待を受け止め信頼関係を築く（人）、保護者や地域の方々を含めた「みんなが安心」を意識する（人）、園所で親しんだ活動や視覚的支援を取り入れる（もの）、ゆったりとした時間設定や生活科を中心とした合科的・関連的な学習活動の充実を図る（こと）、園所との交流を計画する（こと）等があり、それらを行うことで、子供の安心した生活や学びにつながる取組を進めていくことができた。１年生が少しずつ学校に慣れ、安心して学習に取り組み、自分たちで考え、学ぶ楽しさや行動する喜びを感じていることは大きな成果であった。

児童が主体的に自己を発揮するためには、児童の理解、これまでの育ち、これからの学びをつなげていくことが大切である。今後も乳幼児期、低中高学年、中学校との連携などで長期的な学びのつながりについて考えるとともに、学校の職員、他校種との先生との交流や連携を行いながら、取組を進めていきたい。

（２）【三次市酒屋保育所】

①　研究主題

小学校の先生と過ごした一年間

②　実践報告の概要

令和４年度、幼児教育長期派遣研修として１年間、小学校の先生を保育所に迎えた。今まで小学校と

の連携は小学校発信のもののみで、交流をしたいが授業の邪魔をしてはいけないと考え、保育所にとってハードルの高いものだった。幼児教育長期派遣研修を通して小学校の先生と直接交流し、話し合いを重ねることで、小学校へのイメージが変わり、保育所側から発信しようという思いに変化していった。小学校へアプローチすることで、「学校探検と５年生との手作りおもちゃあそび」「２年生と山探検」「１年生と体を使って遊ぼう」の交流を増やすことができた。保育士が小学校について理解を深めることは、就学前の子供、保護者への不安を和らげることにもつながった。

小学校の先生の子供たちの話をじっくりと聞き具体的に伝え褒める姿、保育士と違った視点で子供を捉える姿から、自身の保育を見直すきっかけとなり、多様な側面から子供を捉える保育のおもしろさに改めて気付くことができた。また、保育所での子供の育ちが小学校の学びにつながっている道筋を理解し、子供と関わっていくことが大切であると感じた。

小学校の先生と過ごした中で、保育所は「環境・生活経験・あそび」が中心で、小学校は「授業」という学び方の違いはあるが、「主体的な学び」を大切に、成長を願っていることは同じであるということを感じた。「学び」をつなげていくためには人と人、学校と園のつながりといった相互のネットワークが気軽にできることが大切である。お互いに「何か楽しいことを一緒にしませんか？」と思える日常的な交流を目指していきたい。

（３）【学校法人住田学園　海田みどり幼稚園】

①　研究主題

主体性を育む保育の在り方

～身近な“かたち”を使ってあそぶ子どもの姿を通して～

②　実践報告の概要

本園は、１年を通して麦の栽培等の自然との触れ合い、戸外遊びや身近にあるものを使った遊びが、主体性や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の育ちにつながると考え実践している。

海田町では、平成 31 年から令和４年まで、町全体で幼保小連携・接続事業を受託し取り組んでいる。その取組の一環で、「かたちのあそびや学び」をテーマに、園と小学校で互いの保育、授業を参観し、相互理解を深めることになった。そこで、「主体性を育む保育」の研究の中で、特に身近な「かたち」を用いた遊びに着目し、研究を進めた。年少児クラスでは、切ったり貼りつけたりすることで形が変わっていくおもしろさを感じながら制作した。廃材を組み合わせる際に、小さな箱より大きな箱を土台にした方が安定することに気付くなど、遊びの中で「かたち」の特性を捉える姿が見られた。年中児クラスでは作品にダイナミックさが出てきた。年長児クラスでは明確なイメージを持ちながら素材の特性を活かして作品作りを行う姿が見られた。素材を組み合わせる中で、作る楽しさを感じたり、発見したり、難しさを感じたりしながら、自ら学ぶ姿が多く見られた。

自分のやりたい遊びを自分で選び、遊びを作り上げていく経験をすることが、「様々なことに挑戦する姿」、「自分の考えを試行錯誤しながら実現する姿」、「色々な視点から考える姿」につながり小学生になった時の学習の土台となると再確認した。

今回の取組で小学校と連携を行うことで幼児期に育った様々な力が小学校生活につながっていることを実感するとともに、今後も子供たちが自由に考え、表現できる保育を心がけ、小学校との交流を継続的に設けながら、一人一人を大切にした幼小の接続につなげていきたい。

２ 協議内容

（１）質疑応答

〇幼児教育長期派遣研修や連携事業を始める前の連携状況はどうだったか。どのような状況で今に繋がっているのか。

・三次市では小学校が遠方にあり、コロナ禍で入学説明会が中止となったこともあり、十分な連携は取れていなかった。幼児教育長期派遣研修が始まり、連携が始まった。

・海田町では入学前の連携だけであった。事業が始まり、連携の機会が増えた。

〇各施設内で連携内容を共有するための工夫や苦労はなにか。

・今年度、小学校では昨年の取組を継続し、夏休みを利用して保育所と職員交流をしている。スタートカリキュラムを全職員に伝え、他学年の職員も含め、校内全体で温かく関心を持って、子供たちに関わっている。

・保育所で連携を取っているのは特に年長である。「学校を知る」という目的で、特別支援学級の子供についての講演や所内で会議を行っている。

・幼稚園でも主に年長と連携を取っている。他クラスも散歩で訪問する等の機会を設けている。

（２）グループ協議・全体共有等

【協議の視点】幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）や参考資料（初版）等を踏まえ、子供の発達や学びの連続性を確保するため、各園や学校としてこれから何に取り組んでいく必要があるのか。

・毎日「おはなしの時間」を設けて話す力、聞く力、自分の思いを伝える力を身に付けている。

・遊びの中での学びがどれだけ大切であるか学校に伝えることができるように、自分たちのスキルアップが必要である。

・園と小学校で勉強会を開き、意識共有ができる連携の機会を増やしている。

・公開保育を行い、近隣の園や小学校と情報共有をしている。

・写真などを用いたドキュメンテーションを作り、遊びの中の子供たち一人一人の願いや思いを小学校へ伝えている。

・前向きな取組もあるが、実際には連携できていない現状もある。

結論

１．子供たち一人一人の乳幼児期の育ちを理解し、遊びの中で育つ「考える力」や「人と関わる力」が、小学校へ進学した時の自分たちで考え学ぶ楽しさや行動する喜びを感じる力となる。乳幼児期の遊びや生活の中で育まれた資質や能力が小学校での主体的に学ぶ力につながっている。

２．幼稚園、保育所、認定こども園、小学校それぞれの教育、保育の質の向上が必要である。そのため、互いの連携、交流が必要となる。職員の得意なことで連携を進めていくことが望ましい。

３．各園で様々な実践をされ、子供たちの姿を通してカリキュラムの見直しや連携の実践をされていた。公開保育、ドキュメンテーションの作成、オンライン交流など、様々な方法で工夫し、これからも幼稚園、保育所、認定こども園、小学校が「つながり」を継続していくことで、一人一人を大切にする接続につながっていく。